

---

# あなたの時間をもらいます

スラ ラノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたの時間をもらいます

### 【Nコード】

N5705P

### 【作者名】

スラ ラノ

### 【あらすじ】

やりたい仕事をさせてもらえず、ただ適当に過ぎる時間を感じていた瑞穂<sup>ミスホ</sup>。

その前に人から時間をもらっていると言う男性が現れ……。

『時間』をテーマにした、ファンタジー作品です。

## 私からのお願い

時々、時間の流れを忘れる事はありませんか？

気が付いたら、こんな時間になっていた。

時には、そんな風に驚いたりする事もあるでしょう。

では、その理由について、考えた事がありますか？

何かに夢中になっていたから。

何も考えずにのんびりとしていたから。

きっと、そんな理由を思い浮かべて、それで納得しているかもしれないですね。

でも、よく考えてみてください。

その時間は本当にあなたのものとして、そこにありましたか？

あなたが気付いていないだけで、その時間を誰かが奪ってしまった可能性はないですか？

ただ、一言だけ言わせてもらいます。

あなたの時間を奪った誰かにとって、その時間は必要なものだったんです。

だから、どうか怒らないであげてください。

それが、私からのお願いです。

2009年12月18日

オフィス街を歩く人々。

その間を縫うように進む、1人の女性がいた。

「すみません！」

ハイヒールを履いているとは思えない程の速さで走っている、彼女の名前は西条サイシヨウ 瑞穂ミスホだ。

瑞穂は今年の4月、IT企業に就職したが、まだ仕事に慣れないでいる。

また、朝は昔から弱く、今の寒い時期は寝坊してしまう事がほとんどだ。

そのため、瑞穂がこうして走っている事は、日常茶飯事である。

その時、喫茶店から出てきた人とぶつかりそうになり、瑞穂は咄嗟に避ける。

しかし、不安定なハイヒールでそんな無謀な事をしたため、瑞穂はそのまま転んでしまった。

最も、瑞穂が転ぶ事も日常茶飯事だ。

「最悪……」

膝が擦り剥けていたが、今は会社に着く事を優先し、瑞穂はまた走り出した。

瑞穂は会社に着くと、タイムカードを入れた。

57分。

無意識のうちに分だけを見て、瑞穂は安心したようにため息をつく。

この会社の出勤時間は9時だ。

8時57分なら、何とか間に合っている。

そんな事を考えながら、瑞穂は自分のデスクに向かった。

「おはようございます」

「こんなに遅くなって、どうしたんだ？」

「え？」

確かに3分前ではあるが、瑞穂にとってはこれが普通だ。昨日も同じような時間に出勤している。

そのため、この先輩の言葉は疑問だった。

ふと、瑞穂は時計に目をやる。

「嘘……」

アナログ時計を見れば、一目瞭然だった。

明らかに短針の位置が1時間ずれているのだ。

つまり、今は9時57分という事になり、完全に遅刻だ。

「ごめんなさい！」

「いつもギリギリの時間に来るけど、しっかりしろ。学生気分が抜けてないんじゃないか？」

そんな事を言われ、瑞穂は返す言葉が見つからなかった。

時間の辻褄を合わせるため、この日、瑞穂は1時間程残業してから帰った。

不景気のためか、今は仕事がほとんどなく、自主学习の時間がほとんどだ。

それは瑞穂にとって退屈なもので、いつも仕事をしている時は時間の流れが遅いと感じている。

プログラムが組める女性は格好良い。

そんな訳の分からない理由でIT企業を選んだが、今のところ、そんな仕事を任される事はない。

それどころか運用と呼ばれる、システムを管理する仕事を任せられ、自分が望む開発の仕事は当分させてもらえそうにない状態だ。

学生時代、就職してから1年も持たずに辞める人がいるという話を聞いた時は、そんな事あるわけないと感じていた。

しかし、今はその話を十分理解出来る気がした。

「あの、すみません」

その時、そんな声を掛けられ、瑞穂は足を止めた。

そこには、自分と同年代に見える男性がいた。

「何か用ですか？」

直感的にナンパだろうと思い、瑞穂は無視をしようと思っていた。

しかし、男性の顔が自分の好みだったため、思わず返事をしてしまった形だ。

「えっと、こんな事を言うのはおかしいんですけど……」

男性は勢い良く頭を下げる。

「ごめんなさい！ あなたが今日、遅刻したのは僕のせいです！」

「え？」

瑞穂は意味が分からず、首を傾げる。

「別に私が寝坊しただけで……」

「違うんです。僕があなたの時間をもらったからなんです」

「はい？」

ますます意味が分からなくなり、瑞穂は混乱してしまった。

そして、順番に整理しようと考えた。

「あなたの名前、何？」

「あ、池斗イケトです」

「私は瑞穂」

「知ってます」

「え？」

自分の名前を知っているという事に、瑞穂はまた混乱してしまった。

「あ、知らないです！ 嘘です！」

池斗がそんな風に言い直したが、瑞穂は言い直した言葉の方が嘘に感じた。

しかし、詮索してもしようがないため、瑞穂は話を進める事にする。

「時間をもらったって言うだけけど、どういう事？」

こんな事を真剣に聞くのもおかしいと思ったが、少しの間、瑞穂は池斗の話を聞くことにする。

「僕、ここに存在するために、誰かから時間をもらわないといけな

いんです」

「へ？」

「あ、でも、いつもは気付かれないようにもらってます」

瑞穂は既にほとんど理解出来ていないが、最後まで聞けば理解出来るかもしれないと、淡い期待を持った。

「何かに夢中になっていている人や、ボーっとしている人なら、思ったより時間が過ぎていたって感じる程度なので……」

瑞穂自身、時間の流れを忘れる事が時々あるが、それが全てこのせいだとは到底思えない。

「昨夜は夢中になってギターを練習している人がいたので、その人から時間をもらいました」

「じゃあ、今朝は私から奪ったって事？」

「奪ったなんて言い方は……」

「私はあげたつもりなんてないし、奪ったって事でしょ？ おかげで遅刻もしたし」

最も、数分の遅刻は時々しているため、池斗だけのせいとは言えなかった。

ついさつき、寝坊したせいだと言ったばかりでもある。

「あなたの時間をもらうつもりはなかったんです。ただ、走るあなたを避けられなくて……」

詳しい話を聞いたところ、瑞穂が人を避けるため、咄嗟に方向転換をした事が原因らしい。

その時、別の人から時間をもらおうとしていた池斗の狙いが逸れ、瑞穂から時間をもらってしまった。

整理すると、そんな話だったが、信用していない瑞穂にとっては、どうでも良い事だ。

「そういう事なら、仕事中に時間を奪ってよ」

「え？」

「最近、やる事なくて長く感じてるの。あなたが時間を奪えば、あつという間に時間が過ぎるんでしょ？」

そこで、瑞穂は頭を働かせる。

「明日、システムの休日稼働だかで出勤なんだけど、やる事はほとんどないの。だから、私の時間奪ってよ」

「そんな事言われても……」

「じゃあ、よろしくね」

あまり長く話したくないと考え、瑞穂は話を切り上げると、池斗に背を向ける。

「瑞穂さん、またね」

そんな池斗の声が聞こえ、瑞穂は思わず振り返る。

しかし、そこに池斗の姿はなかった。

「あれ？」

隠れられるような場所もなく、どうやって姿を消したのか疑問だったが、瑞穂は深く考える事なく、帰る事にした。

2009年12月19日

土曜に仕事をしている人は大勢いる。

しかし、土曜が休日の瑞穂にとって、今日の休日出勤は憂鬱なものだ。

電車が多少空いていたという利点も確かにあったが、それだけでは埋まらない程の不満がある。

「今日は時間通り来たんだな」

「はい、昨日はごめんなさい」

会社に着くと、瑞穂はデスクに着き、手帳等を出した。

「もうすぐクリスマスだって言うのに、仕事なんてな」

瑞穂が担当しているシステムは、原価計算システムだ。

年末のためか、客が使用したいと言い、今日は休日稼働させている。そのため、瑞穂と先輩の2人が休日出勤となっている形だ。

とはいえ、する事と言えば、トラブルが起らないか監視するだけだ。

つまり、何もトラブルがなければ、監視だけで終わってしまう。

そんな暇な時間をどう過ごすか、瑞穂は考えたが、良い案は浮かばなかった。

「そういえば、西条さんはクリスマスの予定あるのか？」

「プライベートの事なので、ごめんなさい」

この先輩は頻繁に世間話を持ち掛けてくるが、瑞穂はそういった話をするのが苦手だ。

そのため、いつもこうしてかわしている。

「そういえば、知ってるか？」

「……はい？」

しかし、先輩と2人きりの今日はしょうがないと考え、少しだけ話す事にした。

「来年になったら、給料が減るかもしれないって話があるんだ」

「え、そうなんですか？」

そんな話は初耳だ。

瑞穂は今、アパートで一人暮らしをしているため、生活費だけでも多く掛かっている。

とても貯金等出来る状態ではない。

そんな状態で、給料が下がるなんて事があつたら、まず生活出来なくなってしまう。

「今、不景気だろ？ この辺でも倒産してる会社がいくつもあるし、ここも危ないって話なんだよ」

「でも、この会社、株の上場を何年か前にしたって……」

「そうすると何が変わるか、分かっているのか？」

先輩の質問に瑞穂は答えられない。

「ここは社員も多いけど、大企業じゃない。無駄に人件費が掛かる中小企業だよ。今の景気を考えれば、それが大変な事なのは分かるだろ？」

瑞穂は経済について詳しくないため、先輩の話をしつかり理解した訳ではない。

しかし、今の状態が深刻であるという事は何となく分かった。

「虎島<sup>トラジマ</sup>さんを辞めさせたりしないで、ちゃんと上が考えれば良かったんだけどな」

虎島というのは、瑞穂の指導係だった男性社員だ。

そして、会議の席等で上の人に意見をぶつける人でもあった。

厳しい人だったが、瑞穂は虎島の事を良く思い、いつか自分もこんな社会人になりたいと思っていた。

しかし、上に対して意見をぶつけた事で反感を買ったのか、虎島はリストラに近い形で辞めてしまった。

「ホント、虎島さんの言った通りになろうとしてるよ」

今の体制を変えなければ、この不景気を乗り越えていけないといった事を虎島は言っていた。

先輩の話が本当だとすれば、確かに虎島の言った通りになっている。

瑞穂は憂鬱な気持ちで、そんな事を考えていた。

昼になり、瑞穂はコンビニ弁当を食べた。  
まだ午前中が終わっただけだが、瑞穂は既にとても長く感じている。  
これがまだ数時間も続くと考えると耐えられなかった。  
ただ、そんな事を考えてもしょうがないため、午後になると瑞穂は  
自主学習を始めた。

しかし、先輩の話が頭から離れず、瑞穂は勉強に集中出来なかった。  
何度も時計を見て、その度に瑞穂はため息をつく。

その時、ふと瑞穂は昨日会った池斗の事を思い出した。  
信じてはいないが、池斗は人から時間をもらっていると言っていた。  
もし、あの話が本当なら、今この時間をあげたい。

昨日は冗談半分だったが、今は本当にそう思っていた。

「そろそろ終わりにするか」

「え？」

瑞穂は時計を見て、驚いてしまった。

それは、いつの間にか、帰る時間になっていたからだ。

「どうした？」

「あ、いえ……」

瑞穂は荷物をまとめ、帰る事にした。

「お疲れ様です」

「お疲れ様」

瑞穂は会社を出ると、携帯電話を取り出し、改めて時間を確認した。  
しかし、時間は確かに過ぎていく。

あれだけ、ゆっくりと流れていた時間が、あっという間に過ぎてしまっただ。  
まったのだ。

「お疲れ様です」

そんな声を掛けられ、瑞穂は顔を上げる。

そこには、池斗がいた。

「時間をくれてありがとう」

「え？」

この時、瑞穂は池斗から何とも言えない不思議な雰囲気を感じた。

「もしかして、池斗の言っている事、本当なの？」

「僕が本当だと言ったら、瑞穂さんは信じてくれますか？」

池斗の質問を少しだけ考えた後、瑞穂は笑った。

「ごめん、信じられない」

「そうですか……」

残念な様子を見せた池斗に、瑞穂は少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「池斗……って呼んで良いのかな？ 池斗は仕事とかしてないの？」

「うん、してないよ」

「そう……」

そこで、瑞穂は思わず、ため息をついてしまった。

「仕事、辞めたいんですか？」

「辞めたいと言うより、やりたい仕事をしたくなって……」

瑞穂は普段、人に悩み等を話す事がほとんどない。

しかし、何故か池斗には自然と自分の話をする事が出来た。

「何か、私がいる会社、結構やばい状況みたいだし」

「瑞穂さん、そのうち自分のやりたい仕事に就けるよ」

「それがいつになるか分からないからね……」

その時、池斗が困った表情になっていたため、瑞穂はまた笑った。

「ごめん、こんな話するつもりじゃなかったのに」

「話す事で瑞穂さんの心が落ち着くなら、僕は話を聞きます」

「あと、私の事、別に呼び捨てで良いから」

「じゃあ、そうします」

そこで、少しの間、話題がなくなり、お互いに黙ってしまった。

そんな雰囲気は何だか嫌で、瑞穂は自分から話を切り出す事にした。

「この後、食事に行かない？」

「え？」

池斗は少しだけ困った表情を見せた後、笑う。

「うん、嬉しいけど……今日は無理なんです」

「用事あるの？」

「こうしているためには、時間が足りないから……」

その時、瑞穂には、池斗の体が少しだけ透けて見えた。

「……今のは？」

「瑞穂、今度また誘って下さい。じゃあ、またね」

それは、一瞬の出来事だった。

気付いた時には、池斗が目の前からいなくなっていた。

「池斗？」

辺りを見回したが、どこにも池斗の姿はない。

この時、瑞穂の心の中で、池斗が言っている事は全て本当で、池斗は不思議な存在なんじゃないかという考えが生まれた。

しかし、瑞穂はすぐにその考えを否定して、捨ててしまった。

2009年12月20日

この日、仕事が休みだったため、瑞穂は買い物に出掛けていた。買い物と言っても、服やアクセサリーを見るだけで、買う事は稀だ。しかし、この時間を瑞穂は息抜き時間として大切にしている。

クリスマスが近いため、デパートの中は装飾がされ、クリスマスソングが流れている。

それは今年のクリスマス、一人で過ごす予定の瑞穂を少しだけ辛い気持ちにさせた。

そんな理由から、瑞穂は早めにデパートを出た。

しかし、帰ってもする事がないため、瑞穂は体を温めようと近くの喫茶店に入り、コーヒーを頼んだ。

椅子に座り、コーヒーを一口だけ飲んだところで、ふと瑞穂は池斗の事を思い出した。

一昨日も昨日も、池斗は急に姿を消してしまった。

その事について、何か科学的な説明を探したが、まだ見つからない。

「西条さん？」

不意にそんな声を掛けられ、瑞穂は慌てて顔を上げる。

「虎島さん！」

そこには、昨日、先輩との話の中でも話題に上がった、虎島がいた。

「あ、もし良かったら座って下さい！」

「良いの？」

「はい、話も聞きたいですから」

仕事の面で尊敬もしていた虎島との再会に、瑞穂は上機嫌になっている。

先輩と話していた時も、虎島の事を心配していた。

そのため、こうして再会する事は瑞穂がずっと望んでいた事でもあ

る。

「虎島さん、今はどうされているんですか？」

「実は自分の会社を興したんだ」

「そうなんですか!？」

虎島の言葉に、瑞穂は驚きを隠せなかった。

「景気の悪い今、無謀な事をしてるとも思うが、妻も娘も協力してくれてるんだ」

「私は良いと思います！ 頑張ってください!！」

自分の事のように喜んでしまい、瑞穂は自然と声が大きくなっていった。

その事に気付き、瑞穂は少しだけ声のトーンを下げた。

「ごめんなさい、騒いでしまって」

「君は相変わらずみたいだね」

虎島に笑われ、瑞穂は少しだけ顔を赤くする。

「仕事の方は頑張ってる？」

「あ、その……」

瑞穂は少しだけ考えた後、話す事にした。

「今、ほとんど仕事がなくて、自主学习ばかりになっています」

そこで、瑞穂は以前、虎島が話していた事を思い出す。

「開発の仕事が出来ない事も辛いんですけど、それよりも誰に対して仕事をしているのか、分からないのが辛いです」

自分が担当している原価計算システムを、誰が使っているのか、瑞穂は知らない。

それどころか、このシステムで何が出来るのか、それすらもほとんど知らない状態だ。

「虎島さん、言っていたじゃないですか？ もっと、客との距離を近くした方が良いと」

システムに何か不具合があり、それを客が見つけたとしても、その報告が自分達のところに来るまで1週間以上の期間を要する。

それだけでなく、不具合とは言わないまでも使い辛いと感じている

部分は必ずあるはずだ。

しかし、そういった要望が来る事は1度もない。

虎島は、それらの事を改善するべきだと主張していた。

「今、虎島さんの言っていた事を実感しています。噂ですけど、不満を感じていたお客さんがドンドン離れていって、そのせいで仕事が少ないなっているとの事を聞きましたし……」

虎島が真剣な表情で聞いてくれたため、瑞穂は自然と話をする事が出来た。

「この会社で、自分が将来どうしているのか、全く見えないんです。それで今、自分の時間が無駄になっていないか、不安なんです」

瑞穂が話し終え、虎島は少しだけ考え込む様子を見せる。

「今、俺は客を探そうと、様々な人と接触してる。その中には君の会社の客もいるよ」

「え？」

「俺の思った通り、評判は良くない。様々な部門に分けた事によって、実際に対応する人まで話が届かないからね」

そこで、虎島は少しだけ笑う。

「場合によっては、俺がそっちの客を奪うかもしれないよ」

「そうですか……」

「おい、こういう時は自分の会社を思っつて、反抗するべきだよ」  
久しぶりに虎島から説教をされ、瑞穂は少しだけ笑う。

そこで、虎島はまた真剣な表情になった。

「君はどうして、この仕事を選んだのかな？」

「プログラマー……いつかはシステムエンジニアになりたいからです」

「それは何故？」

「え？」

瑞穂は質問の答えを探すため、考え込む。

そして、答えを見つけた。

「不純な動機なんですけど、ゲームが好きだからです」

「え？」

「それで、ゲームがどんな仕組みで動いているのか調べているうちに、プログラムに興味を持つようになって……」

人には隠しているが、瑞穂は自らをゲーマーだと思っている。

俗に解析と呼ばれるような事を行い、そうして得た情報をネットを使って交換する事も頻繁にしている。

そうしているうちに、プログラムそのものに興味を持ち始めたのだ。「ただ文章を書くだけで、様々な事が出来るってすごいと思いますし、だから様々な事を知って、自分でも様々なものを作れるようになりたいんです」

そこで、虎島が笑っていたため、瑞穂は話を止めた。

「変な理由ですよね……？」

「いや、そういうつもりで笑ったんじゃないよ」

虎島は少しだけ悩んだ様子を見せた後、口を開く。

「今はまだ、会社として不安定な状態だから、こんな提案はするべきじゃないかもしれないけど、客を引き込み、しっかりとした経営が出来るようになったら、俺の会社に来ないか？」

それは瑞穂にとって、意外な言葉だった。

「え、私ですか!？」

「ああ、そっだよ」

「でも、私、まだ何も出来ないですし……」

虎島の下にいたのは、わずか数ヶ月だけだったが、出来る事なら、また虎島の下で働きたいと願っていた。

そのため、この提案は瑞穂にとって嬉しい事だ。

しかし、それ以前に瑞穂には自信がなかった。

「君は素直に言われた事を実行出来る人だと思ってる。実力は様々な事を経験すれば、自然と身に付くよ。それに君の動機、仕事をする上で良い動機だと思う」

そこで、虎島は腕時計に目をやる。

「自主学習の時間があるなら、俺の会社に来て、やりたい事をする

ための勉強をすると良い」

「え？」

「まあ、その仕事を与えられるか……それ以前に俺の会社が上手く行くかどうかも分からないけどね」

「はい、分かりました！ 私、頑張ります！」

瑞穂は目標を見つucker事が出来、思わずまた大きな声を上げてしまった。

「俺はこれから用事があるから、席を外すよ」

「はい、ありがとうございます」

「まあ、俺もすっかりしないとイケないね。気付いたら時間が過ぎていたんだよ」

「え？」

それは何て事ない言葉だ。

しかし、今の瑞穂にとっては、聞き流す事の出来ない言葉である。

「時間が過ぎていたって、どういう事ですか？」

「別に大した話じゃないよ」

虎島の話によると、今日は早い時間に人と会う予定だったらしい。

しかし、気を抜いているうちに乗る予定だった電車の時間を過ぎてしまい、急遽連絡したところ、会う時間を遅くしてもらえたそうだ。

「そのせいで時間が空いたから、この店に入ったんだよ。でも、そのおかげで君に会えて良かった」

「もしかして、誰かに時間を奪われましたか？」

「え？」

「あ、何でもないです」

池斗のせいで変な事まで聞いてしまい、瑞穂は慌ててしまった。

「君、面白い発想をするね」

「あ、ごめんなさい」

「じゃあ、また」

虎島が行ってしまい、瑞穂は残ったコーヒーを飲み干した。

今、起こった出来事があまりにも嬉しくて、瑞穂は少しだけ興奮し

ている。

そんな気持ちを抑えようと、瑞穂は大きく深呼吸をした。

ふと池斗の事を思い出し、瑞穂は少しだけ笑う。

「まさかね……」

自分と会わせるため、池斗が虎島の時間を奪ったのではないかと言  
う考えが生まれたが、瑞穂はまたすぐにその考えを捨てた。

2009年12月21日

会社にいる間、いつも瑞穂は退屈な時間を送っていた。しかし、今日は違っている。

虎島に言われた事を守り、瑞穂は目的を持った自主学習を始めたのだ。

経験を積みめば、自然と実力は身に付くと言われたが、こうして自主学習する事も経験だと瑞穂は感じた。

そう考えると、しなければいけない事はたくさんあり、短期間ではとても消化し切れそうにない。

そんな気持ちを持っていたためか、この日はやる事がたくさんあり、あっという間に時間が過ぎて行った。

そして、気付けば定時を迎えていた。やりたい事がたくさんあり、瑞穂は残業をしようとも考えたが、焦りは良くないと考え、帰る事にした。

「お疲れ様です」

いつも帰る時に言っている言葉だが、今日は自然と元気な声で言えた気がした。

瑞穂は会社を出ると、この後の事を考えていた。

いつもは退屈な時間を過ごした事により、精神的に疲れてしまっていたが、今日は違う。

そのため、瑞穂は買い物でもしようかと考えていた。「瑞穂、お疲れ様です」

その声に、瑞穂は慌てて振り返る。そこには池斗が立っていた。

「この前はごめんなさい。こうして話をするためには時間がたくさん必要で……」

「もしかして、今日も私の時間を奪ったの？」

今日、時間が早く過ぎたように感じたのは別の理由だと知っているが、瑞穂はそう言っただけで池斗をからかった。

「瑞穂からはもらってないですよ」

「じゃあ、虎島さんからはもらった？」

その質問に、池斗は明らかに動揺した様子を見せる。

「本当に池斗の仕業だったの？」

「ごめんなさい、お節介だと思ったんですけど……」

「ありがとね」

まだ池斗の話を感じた訳ではないが、本当だったらと仮定して、瑞穂は礼を言った。

「あ、時間ないんだよね？ だったら、今すぐ遊びに行こうよ！」

「え？」

「そうだ！ 遊園地に行こうよ！」

瑞穂は笑つと、池斗の手を掴む。

「ほら、早く来てよ」

「あ、はい」

この時、瑞穂は自分の気持ちに何となく気付いていた。

それは、池斗に惹かれ始めているという事だ。

不思議な事ばかり言う池斗の事を、もっと知りたい。

仕事に対する目標も見つかり、気分が良かったからか、瑞穂はそんな池斗に対する気持ちにも積極的になっていた。

遊園地に到着し、瑞穂は2人分のチケットを買う。

「あ、お金……」

「仕事とかしてないんでしょう？ お礼の意味も込めて、今日は私の奢りで良いよ」

「ごめんなさい……」

「ほら、そんな顔しないでよ」

落ち込んだ様子の池斗を引っ張り、瑞穂は中に入る。

そこにはライトアップされたアトラクションが並んでいた。

「キレイでしょ？」

「はい……」

「絶叫マシンは乗れる？」

「乗った事がないので、分らないです」

「嘘！？ だったら乗ろうよ！」

瑞穂は池斗の手を引き、ジェットコースターに2人並んで乗った。

「大丈夫、大した事ないよ」

池斗が青ざめていたため、少しだけ心配になったが、今更後戻りは出来ない。

既にジェットコースターは動き出し、ゆっくりと進んでいた。

「池斗、ごめん。本当に大丈夫？」

もはや返事もしない池斗を心配しつつも、瑞穂は前に目をやる。

本音を言えば、瑞穂もそこまで絶叫マシンが得意な訳ではない。

池斗をからかうつもりで強引に誘った事を後悔している程だ。

そんな事を考えている間に、ジェットコースターは最も高い場所を過ぎ、急降下を始める。

「キヤー！」

池斗の事を心配する暇もなく、瑞穂は悲鳴を上げてばかりだった。

それは、たった数分の事だったが、ジェットコースターが止まった時、瑞穂はヘトヘトになっていた。

「あ、池斗、大丈夫？」

ふと、瑞穂は池斗を心配して、顔を横に向ける。

しかし、そこには笑顔の池斗がいた。

「ジェットコースターって楽しいですね！ もう1回乗りましょう！」

「嫌だ！」

気付けば立場が逆転していたため、瑞穂は慌ててジェットコースターを降りる。

「瑞穂？」

「男女で遊園地に来たら、こんなのに乗らないのが普通なの！」

「え？」

「もつと、のんびり出来るのに乗るよ！」

その後、2人はメリーゴーランドやコーヒーカップ等に乗る、楽しい時間を送った。

その間、瑞穂は池斗に対して質問を繰り返した。

「池斗って、いつも同じ格好じゃない？」

「あ、はい」

「同じ服を何着も持ってるの？」

「いえ、そういう訳ではないです」

池斗は困ったような様子を見せながらも、全ての質問に答えている。その事が瑞穂は嬉しかった。

「あと、それってミサンガだね？ 流行ったの、10年以上も前じゃない？」

「あ、そうなんですか？」

「どんな願い事をしたの？」

「……ごめんなさい、覚えてないです」

次第にどうでも良いような質問も多くなったが、瑞穂は少しずつ池斗の事を知っていく。

そうして、楽しく過ごし、時間はあつという間に過ぎてしまった。

「池斗、また時間を奪ったんじゃないの？」

「え？」

「だって、いつの間にかこんなに時間が経ってるじゃない」

瑞穂の主張に池斗は笑う。

そんな池斗を見て、瑞穂も笑った。

その時、瑞穂の中に1つの不安が生まれる。

「……ねえ、池斗って何者なの？」

今まで話していた事が本当だとしたら、池斗はどんな存在なのか。そんな疑問と共に、ずっと一緒にいる事は可能なのか、瑞穂は不安になっていた。

「初めて会った時も、この前も突然消えちゃって……あれは何なの

？」

瑞穂の質問に、池斗は少しだけ考えた様子を見せた後、話し始める。

「僕は、どこにも行っていないですよ」

「え？」

やはり、池斗の言葉を瑞穂は理解出来なかった。

しかし、今日は必死に理解しようと思っっている。

むしろ、理解したいと思っっている。

そのため、特に否定する事なく、話を聞く事にした。

「僕がどういふ存在なのか、僕も分かってないです。いつから、こうしているのかも覚えていません」

池斗は少しだけ顔を下に向け、話し続けた。

「ただ、誰かから時間をもらわないと、こうして存在する事が出来ないんです」

「存在する事が出来ない？」

「誰からも僕の姿は見えないし、声も聞いてもらえないんです。触る事も出来ません」

そこで、池斗はため息をつく。

「今日は瑞穂に会うために、たくさん時間をもらっちゃったから、困ってる人がいるかもしれないです」

「そう……」

まだ半信半疑ではあるが、瑞穂は少しずつ、池斗の事を理解し始めている。

そして、理解すればする程、抑え切れない思いが大きくなっていった。

「でも、誰かから時間をもらえば、こうして会えるんだよね？ ずっと一緒にいられるんだよね？」

少しでも長い時間、一緒にいたい。

まだ会ったばかりの池斗に瑞穂はそんな思いを持っていた。

その時、また池斗の体が透けて見えた。

「今日はここまでみたいです。瑞穂、またね」

「待つて！」

瑞穂が止めたが、池斗はまた一瞬で消えてしまった。

「池斗？」

瑞穂は辺りを見回す。

「そばにいるんだよね？ 私の時間あげるから、もっと一緒にいてよ」

池斗に届いていると信じて、瑞穂は何度もそう言った。

しかし、この日、池斗が再び姿を現す事はなかった。

2009年12月22日

昨夜、池斗がまた姿を消してしまっただけから、瑞穂は池斗の事ばかり考えている。

何者なのか分からないまま、池斗に惹かれる自分に焦りも感じていた。

「西条さん？」

そんな声を掛けられ、瑞穂は体をビクつかせる。

そして、今は勤務時間中で会社にいた事を思い出す。

「しつかりしろ」

「ごめんなさい」

瑞穂は頭を切り替えると、今日も自主学習に取り組んだ。

しかし、なかなか集中出来ないまま、昼になってしまった。

そして、瑞穂は少しだけ考えた後、外へ出る事にした。

既にコンビニで弁当を買ってあるが、気分転換になればと思っただけの事である。

「瑞穂？」

そして、もしかしたら池斗に会えるかもしれないという期待もあった。

その期待通り、池斗はそこにいた。

「ずっと近くに来てくれたの？」

瑞穂の質問に、池斗は頷いた。

「昨日、瑞穂と話してから、ずっと考えていました」

池斗は真剣な表情で続ける。

「僕は自分がどういふ存在なのか、知る必要があると思いました」  
瑞穂は何も言えず、黙って池斗の話を聞いている。

「それで、僕は瑞穂の事をずっと待っていた気がするんです」

「え？」

また、池斗から意外な事を言われ、瑞穂は驚いてしまった。

「僕は長い時間、眠っていた気がするんです。その間、ずっと瑞穂の事を思っていました」

そこで、池斗は笑顔を見せる。

「僕は瑞穂と一緒にいると楽しいんです。ずっと、瑞穂と一緒にいたいです」

「ちよつと、いきなり何言ってるのよ!？」

心の準備が出来ていなかったため、瑞穂は慌ててしまった。

「そもそも私をずっと待ってたって、どういう意味？ この前、出会ったばかりじゃない」

「僕もよく覚えてないけど、そう思ってたんです」

その時、また池斗の体が一瞬だけ透けた。

既に何度か経験しているため、瑞穂は池斗がまた姿を消してしまうと、すぐに分かった。

「待って！ 私も池斗に言いたい事があるの！」

「ごめんなさい、今度また聞きます」

瑞穂は自分の思いを池斗に伝えようとした。

しかし、その前に池斗は姿を消してしまった。

「バカ……」

池斗に聞こえるよう、瑞穂は大きめの声で言った。

瑞穂はデスクに戻ると、コンビニ弁当を食べ、また自主学習を始めた。

しかし、池斗との事があり、さらに集中出来なくなってしまうている。

そのため、明日は祝日で休みだが、このまま早退してしまおうかとも考えた。

「西条さん、知ってるか？」

「え？」

先輩から声を掛けられ、瑞穂は慌てて顔を上げる。

「今、虎島さんが来てるんだよ」

「そうなんですか!？」

もしかしたら、会社に戻る事になったのかもしれない。

そんな事を一瞬考えたが、虎島が自分の会社を興したと言っていたため、すぐに違うと感じた。

「虎島さん、自分で会社を興して、うちの会社の客を奪おうとしてるらしい」

「え？」

「それで、上の人が呼んで止めようとしてるんだよ」

先輩の話の真偽は分からないが、十分にありえる話だと感じた。

「すいません、少しの間、席を外します」

そして、瑞穂は部屋を出て行った。

自分に何が出来るかは分からないが、居ても立ってもいられなかったのだ。

この会社には会議室がいくつかあるが、使用中は1つだけだった。聞き耳を立てると、中から声も聞こえてきた。

「この会社に対する復讐のつもりか？」

「君は辞めた後まで、この会社に迷惑を掛けるのか？」

複数の声が聞こえ、虎島が責められているようだ。瑞穂は感じた。

そして、瑞穂は大きく深呼吸をすると、ドアをノックする。

「失礼します」

それだけ言って、瑞穂は中に入る。

そこには5人に責められている虎島がいた。

「西条さん？」

具体的に何を言われたのかは分からないが、虎島は弱気な表情になっている。

それだけ確認し、瑞穂は決心する。

「虎島さんは復讐なんかではなく、お客様の事を考えて行動しているだけです」

こんな事を言えば、ただでは済まないと思ったが、瑞穂は話を続ける。

「お客様は、より良いものを求めています。この会社ではなく、虎島さんの会社を選ぶとしたら、それはこの会社が悪いという事だと思えます」

「西条さん……？」

虎島が止めようとしている様子だったが、瑞穂は止まらなかった。

「虎島さんがしている事は正しいです。あなた達が今している事は間違っています」

そこまで言い切り、瑞穂は大きく息を吐く。

同時に自分が何をしてしまったのか、冷静に考えられるようになった。

「あ、私……」

「君、自分が何を言ったか、ちゃんと理解してるんだろうね？」

「彼女は今年入った遅刻常習犯で、学生気分が抜けてないから、こんな事が言えるんですよ」

そんな事を言われ、瑞穂は顔を下に向ける。

「いえ、彼女は1年目なのに、素晴らしい志を持った社会人だと思います」

そう言ったのは虎島だった。

「彼女の言う通り、私があなた方に文句を言われる筋合いはありません。これで失礼します」

瑞穂は虎島に手を引かれ、会議室を出た。

会社を出たところで、虎島は瑞穂に笑顔を見せる。

「ありがとう。君のおかげで助かったよ」

「いえ、私は何も……」

「いや、嫌味な事をたくさん言われて、挫けそうだったんだよ。本当にありがとう」

虎島から礼を言われ、瑞穂は照れくさそうに笑う。

しかし、すぐにある事を考えた。

「私、明日からどうしましょうかね？」

あれだけの事を言ってしまった、どう考えても、この会社にいられる気はしなかった。

「さっきの気迫はどうしたの？」

「いえ、さっきは無我夢中だったので……」

瑞穂の言葉に、虎島は笑う。

「だったら、俺の会社に来ないか？」

「え？」

いつの間にか、虎島は真剣な表情になっている。

「俺と一緒に営業をやって欲しい」

「営業ですか？」

「君のしたい仕事とは異なるが、客と直接やり取りをする事も勉強になるはずだよ」

突然の申し出に瑞穂はどうするべきか悩んでしまった。

「俺も営業は慣れていないが、学べる事がたくさんあると感じてる」

「でも、私なんかが入ってしまったら、上手く行かないと思います」

「……」

「それは大丈夫だよ」

そこで、虎島は少しだけ考えた様子を見せた後、口を開く。

「君は若い頃の俺にそっくりなんだよ」

「え？」

「俺もゲームが好きで、昔はパソコンのゲームを夜更かししてやってたんだ」

虎島からそんな話を聞くのは初めての事で、瑞穂は意外だと感じた。

「技術的な面で言えば、今より随分と劣っていたけど、俺は夢中になってたよ。それで、自分もこんなものを作ってみたいと思って、この業界に入ったんだ」

「そうなんですか？」

虎島との意外な共通点を知り、瑞穂は嬉しくなった。

「おかげで客の目線に立つ事が出来ると俺は感じてる。だから、君も大丈夫だよ」

そこまで言われ、瑞穂の考えは固まった。

「私、また虎島さんの下で働きたいです」

その言葉に、虎島はまた笑顔を見せる。

それから連絡先を交換した後、虎島は行ってしまった。

瑞穂は退職する事を伝えるつもりでいるが、どんな顔をして会社に  
戻るべきか分からず、少しの間、虎島との話を思い返していた。

その中で、瑞穂は自分がゲームに興味を持った理由を思い出す。

そして、それは同時に様々な事も思い出させた。

「返事はしなくて良いから。池斗、そばにいるんだよね？」

池斗が聞いてくれるかどうか不安だったが、瑞穂は大きな声で言っ  
た。

「明日、ついて来てくれないかな？」

「分かりました」

そんな声が聞こえ、瑞穂は辺りを見回す。

しかし、声がしただけで池斗の姿はなかった。

「じゃあ、約束ね」

瑞穂はそれだけ言うと、深呼吸をしてから会社に戻った。

2009年12月23日

元々、今日は休みだったが、瑞穂は昨日までとは違った気分で朝を迎えた。

それは、あの会社を辞めたからだ。

手続きがあるため、正式に辞めるまでには少し掛かるが、気持ち的には随分と楽になった。

それだけでなく、また虎島の下で働けると言う事が何よりも嬉しいと思っっている。

しかし、今、喜びを噛み締めている暇はない。

瑞穂は池斗がついて来る事を信じて、外に出る。

目的の場所へ行くまでの道順等は昨日のうちに調べている。

そして、池斗の事を知りたいという強い気持ちもある。

しかし、瑞穂は少しだけ行くべきかどうか迷ってしまった。

池斗の事を知って、それが必ずしも良い結果とは限らないからだ。

「瑞穂？」

その声に振り返ると、そこに池斗がいた。

「……池斗は自分の事を知りたい？」

この質問に対する池斗の答えで、瑞穂は判断しようとした。

「知らないといけないと思っってます」

それが池斗の答えだった。

そして、それは瑞穂の中にもあつた考えだ。

例え、どんな結果であっても、知らないといけない。

根拠は分からないが、そんな気持ちを強く持った。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

その返事の直後、池斗は姿を消したが、瑞穂はついて来てくれると信じて、前に進んだ。

目的地までは電車で約1時間だった。

瑞穂は駅を出ると、少しだけ歩き、目的地に到着した。

そこは大きな病院だ。

瑞穂は病院に入る事無く、広場のようになっている場所へ行くと、そこにあつたベンチに座る。

「池斗、覚えてる?」

「はい、思い出しました」

いつの間にか、池斗は隣に座っていた。

「私達は、この場所であつたんだよね」

瑞穂の言葉に、池斗は頷く。

「ここで池斗がゲームで遊んでいて、私が話し掛けた」

「瑞穂、僕のゲームを取り上げて、全部クリアしちゃいましたね」

「だって、楽しかったんだもん。それより、取り上げてなんて言い方やめてよ」

それは今から10年以上も前の話だ。

まだ8歳だったら瑞穂は、この辺りに暮らしていた。

そして、入院している祖母のお見舞いによく来ていた。

しかし幼い瑞穂はよく退屈してしまい、病院を出ると、ここに来た。そして、池斗と出会つたのだ。

「私がシステムエンジニアを目指してるのは、池斗のおかげだよ」

少しずつ、ここにいた時の事を思い出し、瑞穂は笑う。

しかし、同時に疑問も生まれた。

「でも、どうしてお互いに忘れちゃつたのかな? こんな大事な事だつたのに……」

時間の経過と共に記憶が薄れてしまうのはしょうがない事だ。

ただ、池斗との出会いは、将来の夢を持つきっかけでもある。

それを忘れてしまつていた事には疑問を持った。

「池斗、何か思い出した事はある?」

ここに来た目的は、池斗がどういう存在なのか知るためだ。

自分と出会つたこの場所なら、池斗も何か思い出すかもしれないと

期待している。

しかし、池斗の表情は暗い。

「……ごめんなさい、やっぱり覚えてないです」

「まあ、焦る事ないよ」

瑞穂は慌てて池斗を励ます。

瑞穂自身、忘れてしまった事がたくさんある。

そのため、池斗が思い出せないのも無理はないと思った。

「瑞穂、もう行きましょう」

「え？ 来たばかりだよ？」

ここにいれば、何か思い出す可能性がある。

そう信じて、瑞穂はしばらくの間、ここにいるつもりだった。

しかし、池斗が浮かぬ表情だったため、しょうがなく帰る事にした。

「もしかして、瑞穂ちゃん？」

そんな声を掛けられ、瑞穂は声がした方へ顔を向ける。

そこには中年の女性がいた。

「やっぱり、そうだ。久しぶりね」

「あの……？」

「忘れても無理ないわね。池斗の母よ」

その言葉に、瑞穂は慌てて池斗の方へ目を向ける。

しかし、池斗は姿を消してしまったのか、いなかった。

「わざわざ来てくれてありがとう」

「あ、いえ……」

池斗の母親は、そこで悲しい目を見せる。

「今日は、池斗の命日ですもんね……」

一瞬、時間が凍り付いた気がした。

「今……何て言いました？」

そう聞き返したが、もう瑞穂は思い出していた。

池斗はこの病院に入院していたのだ。

幼い瑞穂は、詳しい話を聞かなかったが、重い病気だとは聞いていた。

そして、あの日、池斗は亡くなってしまったのだ。

「瑞穂ちゃん、大丈夫？」

「はい、大丈夫です。もう失礼します」

瑞穂はそれだけ言っていると、その場を後にした。

しばらくして、瑞穂は立ち止まると、振り返る。

そこには、顔を下に向けた池斗がいた。

「池斗は気付いてたの？」

「……はい、ここに来た時、すぐに思い出しました」

池斗は本来、ここにはいない人物だという事。

その事が瑞穂の不安を大きくしていた。

「人から時間をもらえば、いくらでもここにいられるんだよね？」

ずっと一緒にいられるんだよね？」

本当は、その質問をする事も怖かった。

しかし、抑える事が出来ずに聞いてしまった。

「……難しいかもしれないです」

「何でよ!？」

「少しずつ……必要な時間が多くなってるんです。上手く人から時間をもらう事も出来なくなってきました」

それは、瑞穂の望んだ答えではなかった。

耐え切れず、瑞穂は顔を下に向ける。

「あ、でも、聞いて欲しい事があるんです。僕はその日……」

「何で、私の前に現れたのよ？」

瑞穂は言っただけいけない言葉だと知りながら、その言葉を止める事が出来なかった。

「何で、一緒にいられないのに、私の前に現れたのよ!？」

「それは……」

「ここにも来なきゃ良かった! もう私の前に現れないでよ!」

瑞穂はそれだけ言うと、走ってその場を後にした。

2009年12月24日

今日は平日で、いつもなら仕事があった。

しかし、あの会社を辞める事を宣言し、虎島の下で働く事にした瑞穂が、仕事に行く事はない。

そのため、瑞穂は家で退屈な時間を過ごしている。

家にもパソコンがあるため、プログラミングの自主学习を進める事は出来る。

外に出て買い物をする事だって良い。

しかし、今の瑞穂にそんな考えは生まれなかった。

ただ、何も考える事なく、瑞穂は時間が過ぎてしまえば良いとさえ考えている。

それは、少しでも何かを考えようとするれば、池斗の事を考えてしまうからだ。

池斗とずっと一緒にいる事は出来ない。

瑞穂はそれを知り、はっきりと気付いた事があった。

それは、池斗の事を好きだという気持ちだ。

池斗が亡くなり、1度は忘れてしまった気持ちだった。

それが今、抑え切れない程大きな気持ちになっている。

それが、瑞穂には辛かった。

だからこそ、何も考えずにいようと必死になっている。

そうしているうちに、瑞穂は眠りに就いてしまった。

病院のベンチ。

そこに幼い自分が座っている。

「瑞穂？」

隣には、幼い池斗もいる。

「何？」

「これ、知ってますか？」

ずっと病院にいるため、池斗の周りは年上ばかりだったらしい。そのため、誰に対しても丁寧語で話すのが癖になってしまっていた。瑞穂は池斗が出した物をじっと見る。

「ミサンガって言うそうです。今日、友達がくれました」

「ああ、流行ってるよね」

「これに願い事をしてつけると、願いが叶うそうです」

「切れた時にでしょ？」

「いえ、つけている限り、少しずつ叶うそうですよ」

池斗の話は瑞穂の知る話と違っていたが、強く指摘はしなかった。そこで、池斗は真剣な表情になる。

「このミサンガに、僕はこんな願いを込めようと思います」

「何にするの？」

瑞穂の質問に、池斗は笑顔を見せる。

「瑞穂との約束が、守れますように……」

瑞穂は目を覚ますと、すぐに体を起こし、時計を確認する。

時計は23時を既に過ぎ、もうすぐ日が変わろうとしていた。

瑞穂はそれだけ確認すると、簡単に支度をして、外に出る。

「池斗!？」

もしかしたら、すぐそばにいるかもしれない。

そんな期待を込めて、瑞穂は何度も池斗を呼ぶ。

しかし、池斗は姿を見せない。

その間も時間は過ぎていつている。

「嫌だ……」

瑞穂は、夢を見た事をきっかけに、ある事を思い出していた。

それは、池斗とした約束だ。

そして、それは池斗が自分の前に現れた理由でもある。

その約束を守るため、瑞穂は今日中に池斗に会わなければいけないのだ。

しかし、一向に池斗は見つからず、瑞穂は立ち止まる。

もう日が変わるまで1分しかない。

瑞穂は諦めると、ただ時計を眺めていた。

そして、デジタル時計の表示が、23時59分59秒になった。

瑞穂は思わず目をそらす。

それは、不思議な光景だった。

周りにいた人が、全員同時に足を止めたのだ。

いや、正確には足だけでなく、全ての動きを止めている。

走り去ろうとしていた車も止まり、よく見れば木々の揺れや風の流れも感じない。

全てのもものが止まってしまったのだ。

しかし、その中で瑞穂だけが動けるのである。

そして、瑞穂は恐る恐る時計に目をやる。

表示はまだ、23時59分59秒だった。

「瑞穂？」

その声に、瑞穂は顔を上げる。

「池斗？」

「僕の事、見えますか？」

「うん、見えるよ！」

「良かった、ずっとそばにいたのに、瑞穂は気付いてくれなくて…

…でも、また話が出来て良かった」

その言葉で、池斗も自分に会おうとしていた事を知り、瑞穂は嬉しくなった。

「これは、池斗がやったの？」

「分からないです。ただ、瑞穂との約束を守りたいと思ったら、こうなっていました」

池斗の言う、約束。

それは、先ほど瑞穂が思い出した事と同じに違いなかった。

「クリスマスイブの夜、瑞穂のお父さんから、お母さんに告白したんですよね？」

「……うん、お母さんは私が小さい時から、何度もそれを言ってきたんだよ」

この話は、幼い2人がしていた話だ。

「でも、私もそんな風に告白されたいって、ずっと思ってた」

あの時に、幼かった2人の時間は止まってしまった。

その時間を動かそうと、2人は当時の話をしている。

「僕はそれを聞いて、瑞穂と約束しました」

「うん、その約束が叶うよう、ミサンガにお願いもしてくれたんだよね」

そこで、2人は少しだけ黙る。

時間がいつまでも止まっているとは思えない。

それでも、この時間を大切にしたかったのだ。

「僕は瑞穂の事が好きです」

「私も池斗の事が好きだよ」

仕事を始め、1人前の大人になったら、クリスマスイブの夜に、お互い告白しよう。

それが2人のした約束だ。

池斗が後少ししか生きられないかもしれないかもしれない。

そんな考えがあったからこそ、大人になった後の約束をしたのだ。

それまで、池斗が生きられるようにと、願っていたのだ。

しかし、池斗は亡くなってしまい、この約束は果たされないはずだった。

「池斗、ずるいよ」

「え？」

「この約束だけ守ってくれるなんて……」

瑞穂の言葉に、池斗は困った表情を見せる。

「池斗、ごめん。私、バカだから、池斗の気持ちに気付かないで……」

瑞穂は池斗の目を真っ直ぐ見たまま、続ける。

「池斗は約束を守るために、ずっと私を待っていてくれてたんだよ」

？」

「はい、そうです」

先日は、待っていた気がすると話していた。

しかし、今は確信に近い形で、言ってくれた。

「じゃあ、池斗の時間……ずっと私がもらっちゃってたんだね」

「え？」

瑞穂は池斗の様子を見て笑った。

「池斗みたいに不思議な力がなくても、私達は誰かから時間をもらったり、反対に時間をあげたりしてるんだよ」

例えば、誰かと遊びに行く事。

話を聞いてもらう事。

さらに言えば、小説を読んだり、映画を見たりする事だってそうだ。

そして、誰かを思い続ける事。

そうして、人はお互いに時間をもらったり、あげたりしている。

瑞穂は、そんな話をした。

「昨日はひどい事を言っちゃったけど、池斗のおかげでやりたい仕事に就けそうだし、ずっと嫌だった自分の時間が好きになれたよ」

そして、瑞穂は真剣な表情になる。

「池斗はもう、ここにはいられないんだよね？」

「……はい」

2人が幼い頃にした約束は既に果たしている。

残された時間は少ししかないはずだ。

それが分かっているからこそ、瑞穂はすぐに言った。

「私はずっと、池斗の事を忘れない。池斗の事を好きだって気持ちも忘れない」

それは、人から時間をもらってまで、自分の前に姿を見せてくれた池斗に対する、瑞穂なりの礼だった。

「……私の時間をあなたにあげます」

その言葉に池斗は笑顔を見せる。

その時、池斗の体が一瞬だけ透ける。

それは、別れが迫っている事を示していた。

その事を瑞穂と池斗はお互いに感じ、そしてお互いに頷いた。

「じゃあ、僕は……あなたの時間をもらいます」

最後にそれだけ言い残し、池斗は姿を消した。

その時、周りが動き出した。

人は普通に周りを通り過ぎ、車も走っている。

時計も進み、クリスマスイブの終わりを示していた。

瑞穂は地面に目をやった後、少しだけしゃがみ、そこにあった物を手に取る。

それは池斗がつけていたミサンガだ。

結局、ミサンガは約束を叶えた今も切れる事なく、輪っかを作ったまま残されていた。

瑞穂はそれを両手で優しく包む。

池斗と再び会う事がなかったら、こんなに悲しくなる事はなかった。しかし、そんな悲しみを全て吹き飛ばす程、大切な事に気付く事が出来た。

様々な気持ちが溢れ、それが自然と涙になって零れたが、瑞穂は拭う事もしなかった。

## 2人分の時間

夜が明け、瑞穂は母親と電話をしている。

「もう2人の惚気話は聞き飽きたから」

母親から、いつも聞いている話をされ、瑞穂は呆れたように笑う。

「うん、仕事の方も大丈夫、心配しないで。じゃあ、またね」

瑞穂は電話を切ると、パソコンに向かい、プログラミングの勉強を始める。

本音を言えば、池斗の事はまだ悲しい。

しかし、それは今、池斗がない事についてだ。

池斗と不思議な時間を過ごせた事は、瑞穂の中で、大切な時間になっている。

あの時間が本当にあつたものなのか、信じられない気持ちもあるが、池斗が残したミサンガを見る度にそれも薄れていった。

最後の時、池斗に時間をあげると言った瑞穂。

そして、瑞穂から時間をもらうと言った池斗。

あの言葉のおかげで、瑞穂は2人分の時間を過ごしている気分になっている。

また、池斗のおかげで変わった事もたくさんある。

その時、瑞穂の電話が鳴る。

「はい、もしもし?」

「西条さん?」

「あ、虎島さん?」

「急で申し訳ないけど、今から来れないかな? 会社の人と決起会も兼ねた忘年会をやるんだ」

虎島の言葉に瑞穂は少しだけ驚く。

「私が行っても良いんですか?」

「正式にはまだ社員じゃないけど、単なる飲み会だし、構わないよ」「じゃあ、行きます！」

瑞穂はそう決めると、すぐに支度始める。

そして、支度を終わると、家を出た。

瑞穂の右ポケットには、池斗のミサンガが入っていた。

## 2人分の時間（後書き）

短期間での連載でしたが、自分の中にある『伝えたい事』を書かせて頂いた作品でした。

小説を書き、それを誰かに読んで頂くという事は、その人の時間をもらっているという事だと思えます。

なので、そうした時間が良いものになったら（作品を楽しんでもらえたら）と、いつも考えながら、小説を書かせて頂いています。

それに限らず、様々な場面で時間をもらったり、あげたりしてるんだという考えを大切にしたいなと考えています。

また、貴重な時間を私の作品を読む時間にして頂き、本当にありがとうございました。

機会がありましたら、また別の作品を読んで頂けると、幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5705p/>

---

あなたの時間をもらいます

2010年12月30日16時00分発行